慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「価値論の諸問題」（社会政策学会誌百八十三ノー）：ミーゼス及びシュピートフ編纂
Sub Title	
Author	気賀, 健三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1933
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.27, No.8 (1933. 8) ,p.1141(107)- 1149(115)
JaLC DOI	10.14991/001.19330801-0107
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19330801-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「價値論の諸問題」

（社會政策學會誌第百八十三ノ一）

——ミーゼス及びシュピートフ編纂——

氣賀健三

獨逸の社會政策學會は、一九二九年九月キッシンゲンに開かれたる同委員會に於て價値論の討論を議決したが之が爲には解釋の相違や説明の阻礙を前以て豫防する必要があるので、同委員會は各價値學説の著者達に自己の學説の敍述を請求することゝした。此依頼は比較的容易に容れられて、一卷の書として之を具體化することが出來るに至つた。其處で一九三一年九月にバンベルグに於て開催されることに爲つた討論會の謂はゞ下書きとして「價値論の諸問題」(Probleme der Wertlehre)と題する一書が一九三一年に同學會より發行された。次いで本年に至つて、該討論の次第を纏めたる一書が同じ標題の下に第二部として刊行された。此處に紹介せんとするのは第一部の方である。

理論經濟學に於て「價値論」ほど色々な學者の主張が相違し、其見解が多岐多端に亘つて居るものは無いであらうとはよく言はれる言葉である。此書は其事情を全く裏書するものゝ如く執筆せる十人の學者が何れも皆多少なりとも相違せる見解を述べて居る。が考察を更に一歩進めるならば此等の相違は必しも根本的な意見の相違から來て居るものでなく、其底には多分に共通な一つの學説が流れて居ることに氣が附く。共通な學説とは何であるか。それ

は即ち所謂る限界效用學說である。限界效用說は前世紀の第四分の三期以來華々しい勢力を得て價値學說の王座を占めたる觀があり、其以來幾多の反對學說の强硬な攻擊に屢ゝ遭遇して居るが、未だ其主たる勢力を喪失して居らぬ樣である。固より其が主張された當時其儘の姿で該學說が維持されて居る譯ではなく、樣々な修正は之を確に受けた。が限界效用說の根本的基調たる價値の主觀的說明と之に配するに限界的觀念を以てすることは效用價値學說の何れにも共通な要素である。

此書に收められたる著者と其標題は次の如くである。

Oskar Morgenstein（Wien）「主觀的價値の理論の三種の基本型式」
V. Furlan（Basel）「經濟的平衡の學說」
Ludwig Mises（Wien）「主觀主義價値論の立場より」
同　「經濟學理論に對する反對論の心理的根據」
Wilhelm Kromphardt（Münster）「カッセルの價値論排斥の根據」
Robert Liefmann（Freiburg in Br.）「價値論並に限界收益說に就て」
Friedrich Gottl-Ottlilienfeld（Berlin）「余の價値論排斥」
Franz Oppenheimer（Frankfurt a. M.）「經濟的價値論」
Hans Zeisl（Berlin）「マルクシズムと主觀的價値論」
Othmar Spann（Wien）「全體主義の價値論並に價格論の要點」
Wilhelm Vlengels（Königsberg）「價値論の擁護の爲に」（價値論の排斥の根底に横る思想系行の批判）

此中モルゲンシュタイン、ミーゼス及びフロイゲルスは明白な主觀主義論者である。パレートーの跡を追ふフールランもカッセルを補正するクロムプハルトも又はマルクシズムと主觀的價値論とを妥協させやうとするツァイスルも效用說の流を汲むものと觀てよい。主觀主義學說に堂々と叛旗を翻すものは、一種の勞働價値說を稱へるオッペンハイマー、全體主義者シュパン及び價値論無用論者たるゴットルとリーフマンである。此中リーフマンの限界收益說は限界效用說の改造であるとは一般の定說であらう。ゴットルの學說は一見如何にも效用學說を非難するものゝ如くであるが、嘗て筆者が述べた如く結局自說の中に效用說を多分に採入れる必要に迫られて居る。

斯く通觀すれば價値學說は一見十人十色の如くであるが、それは多く說明の方法なり對象に對する觀方なりの相違に基くものゝ樣である。價値並に價格現象其物は主觀的要素を俟つて初めて發生するものであり之の說明に限界的價値觀念を必要とするといふことは現在の價値學說に在つては廣く一般的に容認せられたるものゝ如くである。

次に簡單に紹介する各著者の主張は斯る感を深からしむるであらう。

モルゲンシュタインの說く所に依れば（一一四二頁）所謂る限界效用說は元來、墺太利學派の名稱を受くべきものであつて、時の經過と共に種々なる目的に之を利用する爲に、それは色々な變更を蒙つたといふのである。其變化に三つある。一つはローザンヌ派の平衡論、一つはマーシャルの率ゐるケムブリッジ學派殘る一つはジョン・ビー・クラークを首とする亞米利加學派即ち之である。

モルゲンシュタインは此等の學派の基礎を形作る所の墺太利學派の根本理論をば先づ交易なき單純經濟の假定から始めて交易經濟の社會に順次敷衍して適用しながら、效用說に加へられた諸種の攻擊に答へて居る。即ち價値の大さの測定可能なりや否やの問題に就ては一定の絕對的高さを確定することの不可能であるが又不必要であることを

說き（一三―一四頁）原子論的傾向に關する非難に關しては、效用說が必しも一財の價値をば全く他財の價値と無關係なものと考へるものでないことを辯明し、必ず全體との關係に於て之を觀察せる次第を說明する。（一二―一三頁）

又費用に關してはそれが失はれたる效用、即ち或るより重要なる欲望の滿足の爲にそれより僅に一歩丈け重要性の劣れる欲望滿足に役立つものの效用を放棄する其放棄せられたる效用が結局費用を意味すると解釋して費用と效用とが相調和すべき性質のものなることを明にする。（一四―一五頁）

次いでローザンヌ學派に論及し、同學派の代表的學者とされて居るパレートーのオフェリミテ（Ophelimitet）は即ち一程度の欲望を意味するものであつて決して效用概念を無視して成立する概念ではないこと、又所謂る平衡論なるものは價値決定の原因が單一でなく多數である故に價値は因果的でなく函數的に解釋せらる可きであるといふ主張であるが、墺太利學派は決して函數的說明を否定するものでなく唯〻現實に存在する函數的關係をより具體化して說明する爲に因果的方法を採用したのであることなどを說く。（一二―一六頁）モルゲンシュタインは更に、平衡論に於て價値と費用との關係が不明瞭なること、又パレートーのオフェリミテの概念排斥は結局徹底し切れぬ次第を指摘して居る。

英・米の學派は如何といふに、英國はマーシャル、キャナン、エッヂワォース等の率ゐる所であるが、古典學派との調和を試みる外、元の墺太利學派に對して多大の進歩を示す所なく何等體系的完成を齎らさぬ有樣であるといふ。米國に於いては效用說はクラークに依つて著しく歷史學派の方向に曲げられた形である。此曲歪は米國の行動主義の心理學の影響に依るものであるが、モルゲンシュタインは之に對して「墺太利學派の獨自に生み出せる心理的基礎は如何なる心理學派とも如何なる點に於ても無關係である」（三二頁）ことを斷言する。即ちモルゲンシュタインは心理學的に曲げられたる米國の效用說を不正當なものと考へるのである。

モルゲンシュタインの結論はこうである。結局三種の基本的型式の基礎は墺太利學派の理論であつて、此基礎は該學說が如何なる進歩を向後成し遂げやうとも不變であると。

次のフールランの經濟的平衡論（四五―七一頁）は專ら平衡論の方法論的議論である。先づ科學は現實に對して抽象を施すことに依つてのみ可能となることから說き起し、經濟學の爲には經濟人（Homo economicus）の假定、經濟的原則の假定それから個々の相互間並に全體に對する或函數的關係の想定の必要であることを述べる。

更に生產―交換―消費―生產―……の相關々係を一體として見ることの必要を說き、又數學的方法の採用が「唯、單に材料の精製の爲の實際的要具に外ならざるものであり、……其論理的性質より觀れば所謂る數學的經濟學者が爲す所のものは他のあらゆる理論家が爲す所のものと何等變つて居らぬのである」ことを主張する。終りに頗る抽象的なる平衡論を如何にして動態理論に發展せしむ可きかの「最大重要の問題を提出し、先づ經濟的平衡の空間的要素たる地位の制限に關し第二に數學的生物學の要素即ち經濟人の制限に關し、第三に組織的要素即ち社會成員の性質に關して新に種々の條件を想定せねばならぬと述べて居る。

斯くしてフルランは結論として經濟的平衡論の最も緊切なる任務は此抽象的なる理論をば如何に現實の經濟相に當嵌めて說明して行くかといふことであると說く。此論文に於て吾々は抽象的理論の方法論上の辨解を能く知ることが出來る。

次に揭げられたるミーゼスの「主觀主義價値論」（七五―九三頁）及び最後に置かれた同じ著者の「經濟理論に對する抵抗の心理學的基礎」（二七五―二九五頁）なる二つの小論文は限界效用學說に加へられたる非難に對する色々な

辨明や方法論的説明や或はマルクシズムに對する抗議反駁などで、至つて斷片的なものが多く取立てゝ一々説明する要はないであらう。唯之を讀んでミーゼスの思潮を端的に知る一助と爲る效果があるとは言へるであらう。

次のカッセルに關するクロムプハルトの論文は（九七―一〇六頁）はカッセルの價値論無用論に關する簡單な註釋である。カッセルの價値論排斥はそれが誤つて居るから排斥するといふのでなく無益であるから不用だといふ教育上の目的に出づるものであること、而して彼の價格論は結局暗に效用説を承認して居ること、併しカッセルの效用説攻撃に全然正當な理由が欠けて居るのではないことなどを略述せる小論文である。カッセルの價値論の特質を知るには好都合な論文である。

リーフマンとゴットルの論文（一一〇―一三二頁及び一三五―一四五頁）は共に價値論放棄説を主張する自説の略述である。リーフマンの説は、謂はゞ極端な主觀主義である。一定の財貨の存在量を云々し之に就て價値を論ずる所の學説は技術的―物質的學説であつて、價格現象の根源に溯らざるものであるとして排斥する。リーフマンは全く財貨から絶縁して純粋に心理的に考へられる所の快樂と苦痛（Lust u. Unlust）との比較より生れる收益（Ertrag）が限界的に均等に爲る樣に各人が行動するといふことから價格並に所得の形式を説明しやうとするのである。彼に據れば「價格並に所得の形成の交換經濟的現象は唯精神的又は靈的現象に等しいものである」（一一五頁）のである。限界效用説に就ては、それが事實不可能な效用の大さの測定可能を條件とすること、一定量の財貨の存在量を假定する不徹底、財貨論に於いて效用と費用との間に存する循環的論理などを缺點として指摘して居る、效用説に次いで客觀主義の學説並に函數的觀察法とに批判の鉾を向けて居るが、何れも極めて概括的であつて其眞髓を窺ふに足りぬ。

ゴットルは自己の價値論排斥の意味を説明することに努めて居る。即ちゴットルは曰く「余の排斥は、吾々の科學の中價値論と呼ばるゝ領域に含まるゝ一切のものに擴げられるのでなく」又「余は決して價値論のみに反對するのでなく……余の排斥は今日吾々の科學に於ける理論の進め方全體の認識批判的態度に關するものである」（一三五頁）と。ゴットルは生活としての經濟といふ觀方から全體主義的方法論を採り、價値の代りに所謂る經濟的ディメンジオンなる新概念を提出する。經濟的ディメンジョンとは物の長さとか大さなどに比すべき或數的觀念であつて人間の總ての評價の基礎と爲るものであり、同時に又ゴットルに依れば評價の結果として發生するものなのである。經濟的ディメンジョンは貨幣を通じて明確な數的表現となり、個々の價格の規準を示す職分を果すのである。斯樣な考へ方は經濟生活を認識論的に見直すことから生れて來るので、之はゴットルに依れば從來の解決すべからざる渾沌たる價値論等から免れて正しき途へ進む爲に必要なことなのである。ゴットルに依れば從來のあらゆる價値理論は言葉に捉はれて居る爲に、固のまゝの方法論上の立場を固執する限り決して此迷妄より脱却することは出來ぬのである。

オッペンハイマー（一四九―一七五頁）は方法論を重要視し古典派經濟學の批判に筆を起し、價値の説明の爲に先づ靜態を假定するの必要を論ずる。オッペンハイマーは理論の歴史的性質を强調するに努め古典學派の誤が平等なる自由競爭の社會を永續的なものと考へた點にあることを指摘し、封建制度の下に於ける特權階級と大土地所有との存在、資本主義社會に於ける獨占形態と大土地所有等の社會的權力を考慮すべきことを主張する。

次いでハンス・ツァイスルはマルクシズムと主觀主義の價値論に就て論ずる。（一七九―二〇〇頁）先づ主觀主義の理論に就て其創説以來最近に至るまで成し遂げられたる進歩を概觀し又其特質が抽象的なる點に在る事、從つて

經驗的には大數の法則の實證に依つて具體化せらる可き性質のものなることを指摘する。之に對しマルクスの經濟理論は頗る現實的であり、傾向を表示することを目的とするものであるが爲に、ツァイスルは之の精確なる理論的表現の爲には主觀主義理論の補充が必要であると考へる。主觀的理論に比較せるマルクスの理論の特質は「前者が價格形成の問題が經濟の主要部門を包含するもの」と考へたるに對し、「之をば經濟現象の一部と考へ然も經濟的現象をば更に社會現象の一連鎖と考へた」（一九七頁）點に在るといふ。ツァイスルに依れば、經濟學者の任務はマルクス的方法に從つて一定の社會的勢力を考慮し、社會現象の一面としての價格現象を觀察し、之の方向に主觀主義の理論を訂正して行くことに在るのである。

次はシュパンであるが、其說く所は全體主義の價値論の約說である、（二〇二―二二五〇頁）シュパンは原子論的なる限界效用說、效用の一定の大さを想定するが如き數學派の理論を全然排斥する。經濟とは諸種の給付の構成であり價値並に價格は此構成の一種の表現なのである。而して此構成は單に機械的に出來上つたものでなく或る一つの目的の下に成立せる有意義なる全體を爲すものであるのである。斯樣な見方からシュパンは平衡狀態の假定を設け、斯る平衡狀態の下に於て各人の給付は全體に對する關係から判斷して效用を認められるのであつて一つ一つの效用に大さなどゝいふものを認める譯には行かぬのである。效用が測定不可能であるといふことはシュパンが限界效用說に對して熱心に說く所で、價値、即ち給付の大さは、一、全體の中に於ける其位置、二、個人に取つての重要性、三、個人に取つての其位置の重要性とに依つて影響されるものであると爲して居る。從つて個々の評價は結局或全體の評價から派生して來るものと解せられるのである。測定不可能なる價値、即ち給付は給付の外面的な使用順序が定められることに依つて量的表現を得るに至ることに爲る。

最後にフロイゲルスは限界效用說の發展と共に生れ來つた所の所謂る價値論無用論に對して價値論辨護の小論文を載せて居る。彼はゴットルを初めカッセル、ディーツェル、リーフマン等の學者を俎上に載せ、ゴットルに就ては、彼のいふ「言葉の支配」「言葉よりの解放」が有害無益な心配であつて、ゴットル自身結局效用說の力を藉りて價値現象を說明して居る次第を指摘する。カッセルとディーツェルに就ても同樣に彼等が暗々裡に價値概念を然も效用價値の概念を利用して價格形成を說明せることを論證する。リーフマンに就ては、其獨斷、勝手な解釋を指摘するのみで彼の誤を暴露せんとして居る。最後に社會主義の經濟理論に就て一言して居るが、要するにそれは社會學に對する裝飾的役割を滿さんとするものであつて獨自の經濟理論としては何等重要性を認めやうとして居らぬ。

以上が粗雜ながら價値論集の紹介である。モルゲンシュタインの效用說の發展の徑路に關する論文に始つてフロイゲルスの效用說擁護に終る此論文集を通讀して、吾人は猶ほ效用說が依然として價値學說の主たる勢力なる次第を窺知するを得る。シュパンの如き或はオッペンハイマーの如き效用說と全く立場を異にする論者が自說の反對論として何より他の異說を擧げずに效用說を擧げるのも亦、該學說が學界に於て未だ頗る强大な勢力を有して居る有樣を反映するものと見てもよいであらう。